

Fig.21 II区出土遺物1 (1/3)

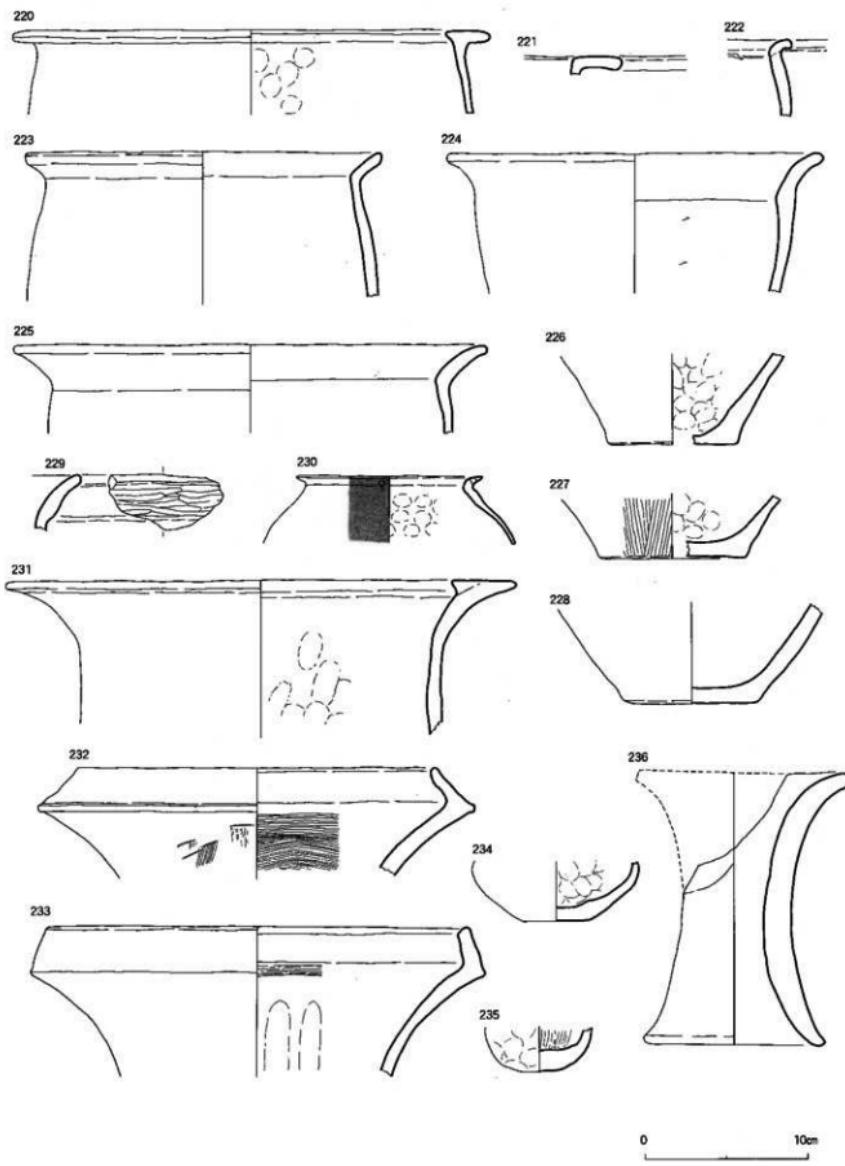


Fig.22 II区出土遺物2 (1/3)

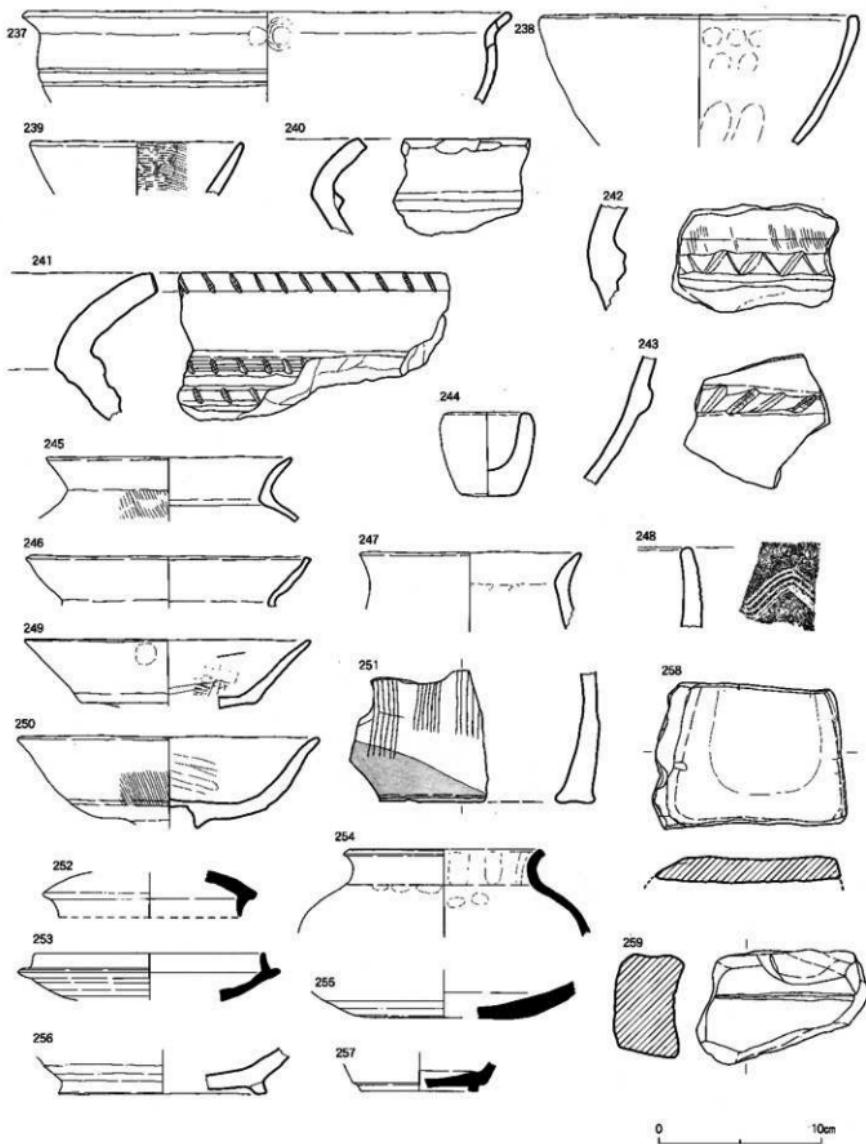


Fig.23 II区出土遺物3 (1/3)

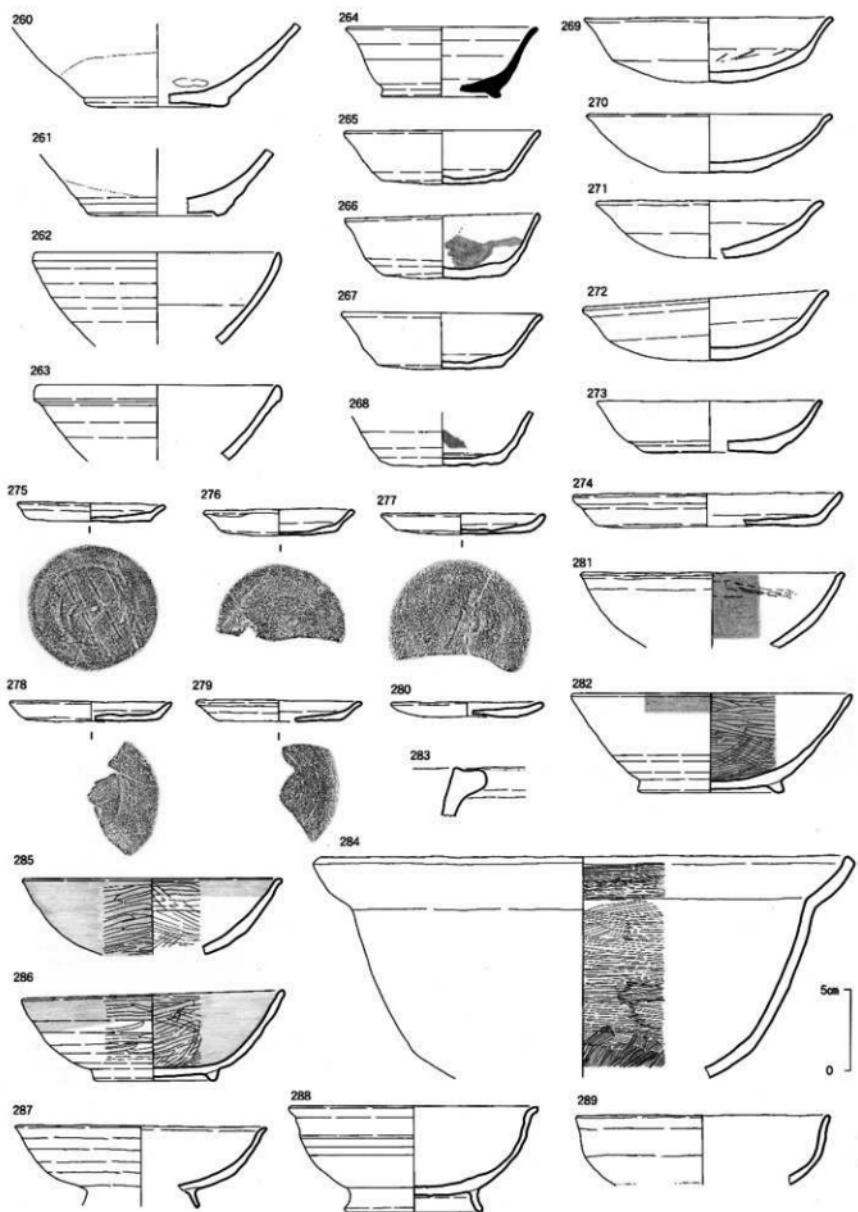


Fig.24 II区出土遺物4 (1/3)

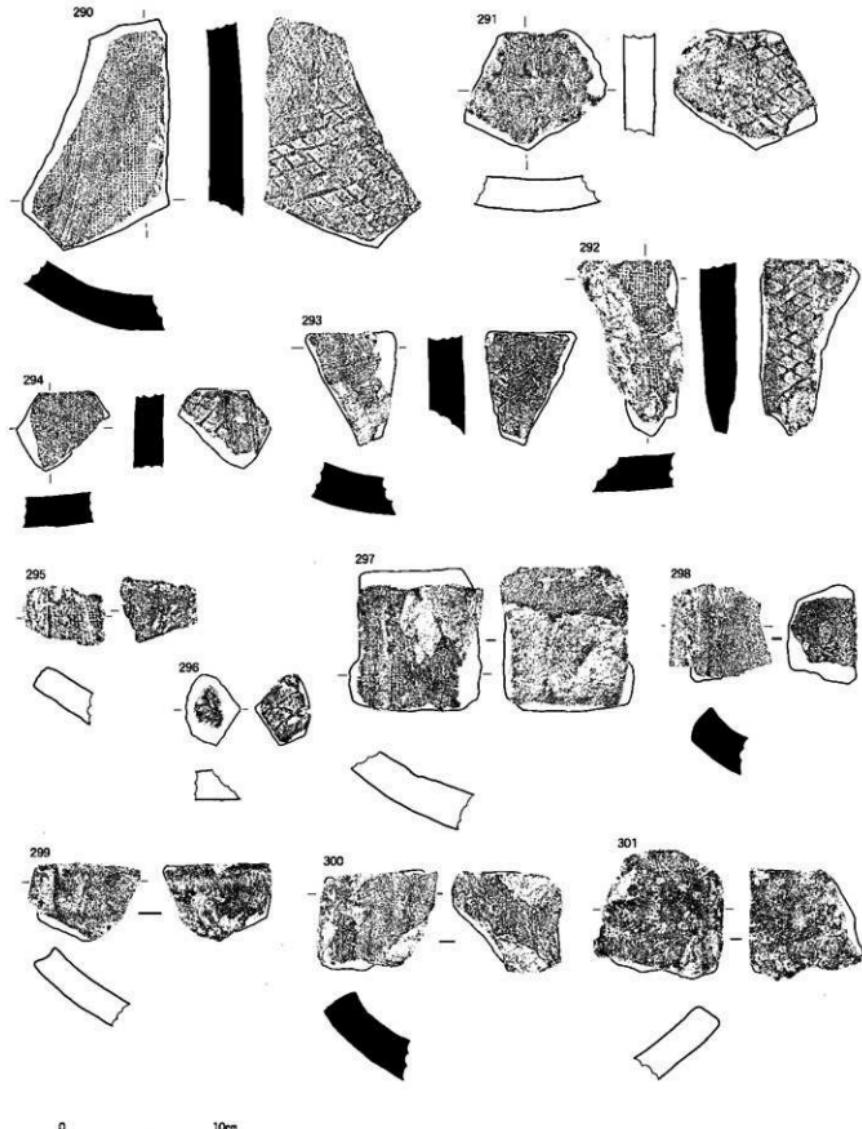


Fig.25 II区出土遺物5 (1/3)

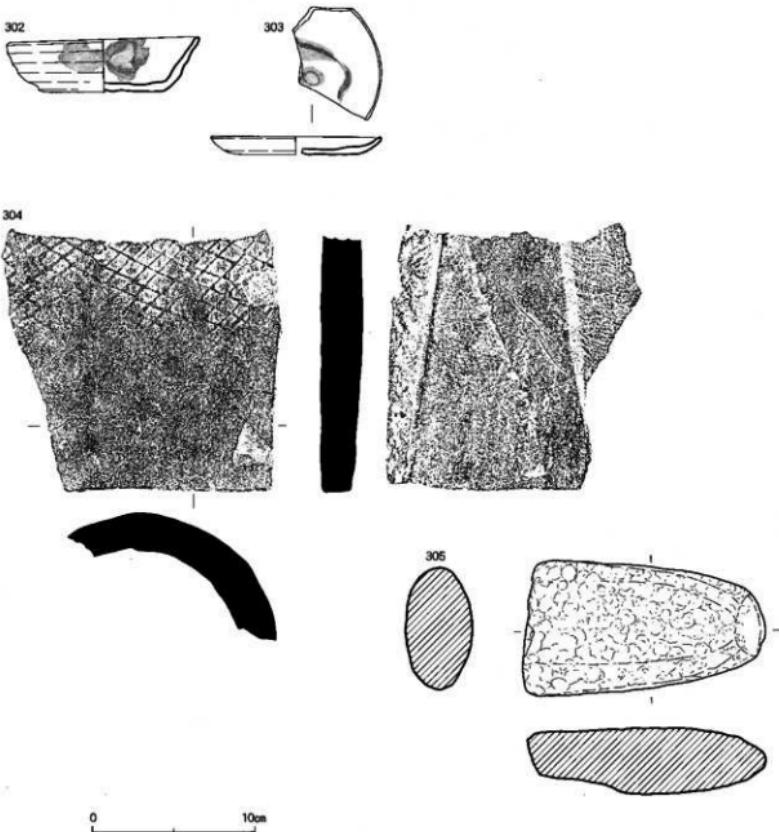


Fig.26 II 区出土遺物6 (1/3)

が回転ナデで、高台内側には指ナデを施す。内面は底部が指ナデで、底部端から坏部は回転ナデである。灰色を呈し、胎土に白色細砂を多く含む。150は小片で遺存部の調整は回転ナデである。灰色を呈し、胎土に砂を少量含む。151は復元高台径13cmを測る。内面と外面底部は回転ナデで、外面坏部にはヘラケズリを施す。色調は暗灰色を呈し、胎土に白色細砂を少量含む。152は復元高台径9cmを測る。調整は全面に回転ナデである。色調は淡灰色を呈し、胎土に白色細砂を含む。焼成はやや軟質である。153は須恵器壺で復元口径17.2cmを測る。調整は遺存部全面に横ナデを施す。色調は暗灰色で、胎土に白色細砂と黒色粒を少量含む。154は龍泉窯系青磁碗II類で中層との境界部で出土した。胎土は淡灰色、釉は灰緑色を呈す。155は土師器楕で高台径7.6cmを測る。外面は坏部から高台部が回転ナデ、高台内はヘラ切りで板状圧痕らしき痕跡が残る。156~163は土師坏である。156は復元口径13.2cm、器高4.2cmを測る。外底部はヘラ切り後に板状圧痕を施し、その他は回転ナデである。色調は淡黄褐

色を呈し、胎土に白色砂と赤・黒褐色粒を少量含む。157は楕の可能性もある。復元口径14cmを測る。全面回転ナデで、色調は外面とも煤が付着しており暗褐色を呈す。胎土に1mm前後の砂を多く含む。158は復元口径15.4cm、器高3.05cmを測る。外底部はヘラ切り後板状圧痕を施し、その他は回転ナデである。外底の一部に黒斑がある他は淡褐色を呈し、胎土に細砂を少量含む。159は復元口径13.2cm、器高3.6cmを測る。外面は底部がヘラ切り後板状圧痕で、坏部が回転ナデ、内面は内底部が指ナデで、坏部は回転ナデ、口縁下に引摺き傷のような沈線がある。色調は明黄赤褐色を呈し、胎土に白色細砂と赤・黒褐色粒を少量含む。160は復元口径12cm、器高3cmを測る。外面の調整は摩滅のため不明、内面は回転ナデを施す。淡灰褐色を呈し、胎土に細砂を少量含む。161は復元口径14.8cm、器高4.3cmを測る。外底部はヘラ切り後に板状圧痕で、その他は回転ナデを施す。色調は淡黄褐色を呈し、胎土に砂を少量含む。焼成は良好である。162は復元口径12cm、器高3.7cmを測る。外底部はヘラ切りで、その他は回転ナデを施す。灯明皿として使用されており、内面坏部と外面口縁に煤が付着する。色調は少し赤みをおびた淡褐色を呈し、胎土に砂を少量含む。焼成は良好である。163は丸底の坏もしくは楕で復元口径15cm、器高4.1cmを測る。全体的に摩滅が著しく調整は不明瞭であるが、外底部はヘラ切り、内底部は面的に滑らかなため、ミガキを施した可能性がある。色調は白みをおびた淡黄褐色で、胎土に細砂を多く含む。焼成は良好である。164～173は土師皿で外底部はすべてヘラ切りである。164は復元口径10.8cm、器高2.2cmを測る。外面は底部がヘラ切り、坏部が回転ナデで内面は底部が指ナデ、底部端から口縁が回転ナデである。色調は淡灰黄褐色を呈し、胎土に砂を少量含む。165は口径11.1cm、器高2.4cmを測る。調整は外面底部がヘラ切り後板状圧痕、外面坏部～内面は回転ナデを施す。灯明皿として使用しており、内面口縁端に煤が付着する。色調は少し灰色をおびた淡褐色で、胎土に細砂を少量含む。166は復元底径7cmを測る。調整は外面底部がヘラ切り後板状圧痕、外面坏部と内面は回転ナデを施す。色調は淡褐色であるが、内外面に煤の付着痕がある。胎土に細砂を少量含む。167は復元底径8cmを測る。調整は外面底部がヘラ切りで、他は回転ナデを施す。色調は淡灰褐色で外底部はやや灰色が強い。胎土に砂を少量含む。168は底径6.5cmを測る。調整は外底部がヘラ切りで、他は回転ナデを施す。色調は淡黄褐色を呈し、外底部に煤の付着痕がある。胎土に砂を少量含む。169は復元底径7cmを測る。調整は外底部がヘラ切りである他は摩滅が著しく不明である。色調は暗灰褐色を呈し、胎土に白色細砂を少量含む。170は復元底径7cmを測る。外底部はヘラ切りである。摩滅著しい。色調は外面が淡灰褐色、内面は黒色を呈す。胎土は精良である。171は復元口径9.2cm、器高1.8cmを測る。底部中央に焼成前の穿孔があり、孔の径は7mmを測る。調整は外底部がヘラ切りの他は回転ナデである。色調は淡黄褐色を呈し、胎土に砂を少量含む。焼成は良好である。172は復元口径9cm、器高1.8cmを測る。全体が摩滅しているが調整は外底部がヘラ切り後板状圧痕で、それ以外は回転ナデである。淡灰褐色を呈し、胎土に白色砂を多く含む。173は底径7.8cmを測る。外底部はヘラ切り、その他は回転ナデである。色調は淡黄褐色を呈し、内底部の一部に煤が付着する。174～176は黒色土器A類極である。174は復元口径14cmを測る。調整は外面が回転ナデで底部付近に指オサエの痕跡が残る。内面はミガキを施す。色調は内面が黒色で外面は淡橙褐色を呈す。胎土に砂を多く含む。175は復元口径15.2cmを測る。調整は外面が摩滅のため不明、内面は斜めから横方向のミガキを施す。色調は内面が摩滅のため暗灰褐色、外面は淡褐色を呈す。胎土は粘土粒子が細かく、砂を多く含む。176は復元口径16cm、器高5cmを測る。調整は摩滅のため不明瞭であるが、外面は回転ナデか。内面は横方向のミガキを施す。色調は内面が黒色、外面は赤～灰色をおびた褐色を呈し、胎土に砂を少量含む。焼成は良好である。177・178は黒色土器B類である。177は楕で高台径6cmを測る。調整は外面高台部は回転ナデで、内面はミガキを施す。色調は内外面とも黒

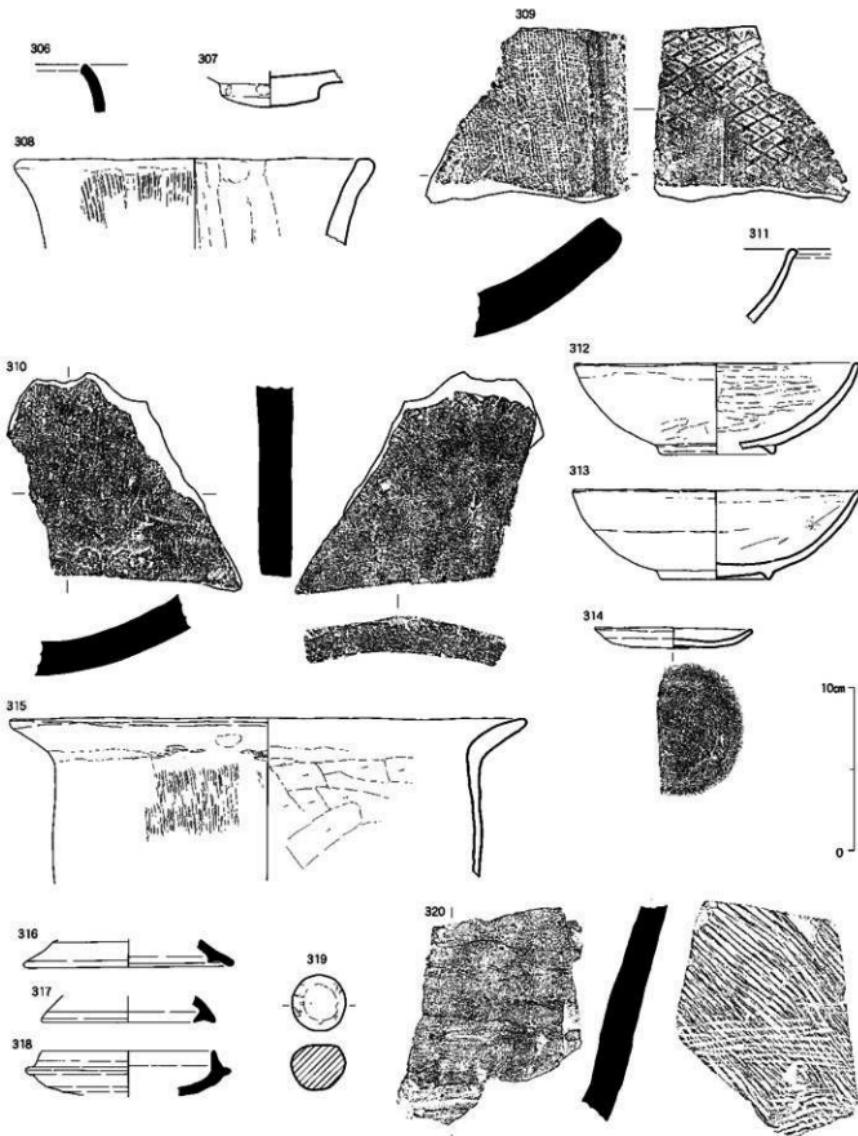


Fig.27 III区出土遺物 (1/3)

色で、胎土は精良で細砂を少量含む。焼成は良好である。178は皿で復元底径9cmを測る。外面は摩滅著しいが、底部に板状圧痕がわずかに残る。内面は横方向のミガキである。色調は外面とも黒色で、胎土に白色細砂を多く含む。焼成は良好である。179は黒色土器A類の高台付鉢である。復元口径23.4cm、鉢部高12.7cmを測る。調整は外面胴部上半が横ナデ、外面下半がヘラケズリで、内面は口縁部下が横方向のミガキ、胴部は縦～斜め方向のミガキ、底部は横方向のミガキを施す。高台を貼り付けた後、接合部を強くナデつける。色調は内面が黒色、外面上部が淡黄褐色を呈す。胎土に白色砂と赤褐色粒を多く含む。180は瓦器椀で復元口径18cm、器高6.5cm、高台径7.9cmを測る。調整は外面が全面横ナデ、内面はミガキを施す。色調は内面が灰白色、外面上部が灰白色～褐色を呈す。焼成は良好である。181は滑石製石鍋片である。厚さ1.2cmを測る。外面に煤が付着する。外面は縦方向に細かなケズリで、内面は斜め方向のケズリである。182は須恵質平瓦である。厚さ2～2.3cmを測る。凸面は細かな斜格子タタキで、部分的に上から板状工具でナデを施す。凹面は布目圧痕が残る。端部は凹面側から浅く切れ目を入れてから割っている。色調は外面が褐灰色、内面は灰白色を呈し、胎土に白色砂を多く含む。焼成は良好である。183は須恵質平瓦で厚さ1.6cmを測る。凸面は細かな斜格子タタキで明青灰色を呈し、凹面は布目圧痕で灰白色を呈す。胎土に白色砂を多量に含む。焼成は良好である。184は土師質平瓦で厚さ2cmを測る。全体に強く摩滅している。凸面は斜格子タタキで灰白色を呈し、凹面は布目圧痕で灰白色を呈す。胎土に白色砂を多く含む。185は土師質の平瓦で厚さ2.4cmを測る。凸面は斜格子タタキで灰褐色を呈し、内面は摩滅のため不明で灰白色を呈す。胎土に白色砂を多量に含む他に赤褐色粒も含む。186は須恵質の平瓦で厚さ1.9～2.3cmを測る。凸面は摩滅が著しいが細かな斜格子のタタキで灰色を呈し、凹面は一部布目圧痕が残るが全面にケズリもしくは強いナデを施し灰白色を呈す。長辺端部は凹面側から深く切れ目を入れて割り、小口側端部はヘラケズリを施す。胎土に白色砂と黒色粒を多く含む。187は須恵質の平瓦である。遺存長13cm、厚さ1.7～2.1cmを測る。凸面は斜格子のタタキで灰白色を呈し、凹面は全面布目圧痕で灰白色を呈す。長辺端部は凹面側から厚みの半分ほどの切れ目を入れて割っている。胎土に白色砂を多く含む。188は須恵質の平瓦で厚さ1.7cmを測る。凸面は斜格子のタタキで青灰色を呈し、凹面は布目圧痕で青灰色を呈す。胎土に白色砂を多量に含む。189は須恵質の平瓦である。凸面は大きな斜格子のタタキで後から板状工具でナデ、色調は灰白色を呈す。凹面は布目圧痕で縞み目がかなり乱れる。灰白色を呈す。胎土に白色砂を多量に含む。焼成は不良である。190は土師質の平瓦である。凸面は細かな格子タタキで灰白～黒褐色を呈し、凹面は布目圧痕で灰褐色を呈す。胎土に茶色と黒の粒を多く含む。191は須恵質の平瓦で厚さ2.5cmを測る。凸面、凹面とも工具を使用したナデであるが、凸面の方が丁寧である。色調は両面とも灰白色を呈す。胎土に白色砂を若干含む。焼成が不良で軟質である。192は土師質の平瓦である。凸面の調整はナデか。193は土師質の丸瓦で厚さ1.7cmを測る。凸面はナデ、凹面は布目圧痕で両面とも黒色を呈す。胎土に白色砂を多く含む。194は土師質の平瓦で厚さ2.6cmを測る。凸面は縞目タタキ、凹面は布目圧痕で上からナデを施す。色調は両面とも灰白色を呈し、胎土に白色砂を多く含む。195は土師質の平瓦で厚さ2.5cmを測る。凸面は縞目タタキ、凹面は布目圧痕で両面とも灰白色を呈す。端部は丁寧なヘラケズリである。胎土に白色砂を多く含む。

196～201は河川床面に張り付いて出土した遺物である。196は土師壺である。復元口径12.4cm、器高3.4cmを測る。調整は外面底部がヘラ切りで、その他は回転ナデである。灯明皿として使用されており、口縁部に煤が付着する。色調は淡灰褐色を呈し、胎土に白色細砂と赤褐色粒を多く含む。焼成は良好である。197は黒色土器A類碗である。口径15.3cm、器高6cmを測る。外面は高台を含め全面が回転ナデ、内面は横方向のミガキで底面は5分割して磨いており、上から見るとミガキが五角

形を呈す。内面口縁端に工具を当てた痕跡がある。198は土師碗で復元口径15.7cmを測る。外底部はヘラ切り後に押し出しを行い、高台を貼り付けた痕跡が残る。外面上半は回転ナデで内面は横方向のミガキを施す。色調は白っぽい淡褐色を呈し、胎土は精良で細砂を少量含む。焼成は良好である。199は壺口縁である。口縁端に刻目を施す。色調は淡黄褐色を呈し、胎土に砂を多量に含む。焼成は良好である。200は土師質の平瓦で厚さ1.9cmを測る。凸面は綾目タタキで褐色、凹面は布目圧痕で灰白色を呈す。胎土に白色砂を多く含む。焼成は良好である。201は土師質の平瓦である。凸面は格子タタキ、凹面は布目圧痕で両面とも灰白色を呈す。胎土に白色砂を少量含む。

II区の出土遺物 (Fig.21~26 202~305) 202~219はII区上層で出土した。202は広口壺の口縁である。復元口径は約30cmを測る。口縁端部に線状の刻目を施す。摩滅のため調整は不明瞭で、外面頸部は横ナデと思われる。色調は黄褐色を呈し、白色砂を多く含む。203は壺で復元口径13.9cmを測る。調整は摩滅のため不明である。色調は淡黄褐色を呈し、胎土に5mm以下の白色砂を多量に含む。204は壺で復元口径23.4cmを測る。調整は外面が綾ハケ、内面がヘラケズリ、口縁部が横ナデである。色調は灰白色を呈し、白色砂を多量に含む。205は壺口縁で復元口径24cmを測る。摩滅著しい。外面口縁端に指オサエ状の瘤みが並ぶ。内面は横ハケである。内面は淡黄褐色で、外面は煤が付着していたため暗灰褐色を呈す。胎土に白色砂を多く含む。206は須恵質の風字観である。色調は灰色を呈し、胎土に白色砂を少量含む。内面と外面側面はナデ、外底部はヘラケズリである。脚はヘラで削って整形しており、そのヘラの痕跡が外底部に残る。内面の陸の部分は強く摩滅している。207は須恵器壺口縁である。横ナデを施し、外面には灰釉が掛かる。外面は青灰色、内面は暗灰色を呈す。208は土師器坏で復元口径15cm、器高2.4cmを測る。外底部は回転ヘラ切り後ナデを施し、内面はミガキである。淡黄褐色を呈す。209は土師器坏で外底部は回転ヘラ切りである。外面は淡橙色、内面灰白色を呈す。胎土に白色砂を多く含む。釉は灰色を呈す。210は陶器瓶で復元底径10.6cmを測る。胎土と釉は灰白色を呈し、胎土は精良で黒色粒を含む。211は龍泉窯系青磁皿のI類か。212は白磁碗IV類で胎土は灰白色、釉はわずかに黄色をおびた灰白色を呈す。213は白磁碗底部である。212とは別個体である。214~219は平瓦で214~217は凸面が斜格子のタタキ、凹面は布目圧痕が残る。218は土師質瓦で両面ともナデしており、端部は凹面側から厚さの半分まで切れ目を入れてから割っている。色調は灰白色を呈す。219は須恵質瓦で両面にナデ調整を施し、端部は凹面側から厚さの1/3程切目を入れてから割っている。色調は青灰色を呈す。

220~259はII区中層から出土した。220~225は壺口縁でいずれも摩滅が著しい。220は復元口径29cmを測る。223は復元口径22cmで明褐灰色を呈す。白色砂を多量に含む。224は復元口径23cmで淡褐色を呈す。内面にヘラケズリの痕跡が残る。225は復元口径29cmで淡黄褐色を呈す。内面胴部にヘラケズリの痕跡が残る。226~228は底部で226は復元底径8cmを測り、内面は指オサエ後ナデか。外面摩滅著しい。227は復元底径9cmで淡褐色を呈す。外面はハケメ、内面は指オサエ後ナデを施す。228は底径8.4cmで淡黄褐色を呈す。全体が摩滅している。229~233は壺口縁で、いずれも摩滅が著しい。229は外面が横ミガキで内面は不明である。230は復元口径11.4cmで黄褐色を呈す。外面に赤色顔料が残る。231は復元口径31cmで外面は灰白色を呈す。232は復元口径21.8cmで暗灰色を呈す。口縁端は横ナデ、外面は綾ハケ、内面には横ハケを施す。233は復元口径26cmで淡褐色~黒色を呈す。内面は口縁に横ナデ、外面に綾ナデの痕跡が残る。234・235は壺胴部で摩滅著しい。234は底径4cmで灰黄褐色を呈す。内面に指オサエ、外面は赤色顔料の痕跡が残る。235は灰白褐色で外面に指オサエ、内面にヘラナデの痕跡が残る。236は器台で底径11cm、明褐色を呈す。胎土に白色砂を多量に含む。237~239は鉢で摩滅が著しい。237は復元口径29.8cmで淡褐色を呈す。胎土は精良。調整不明。口

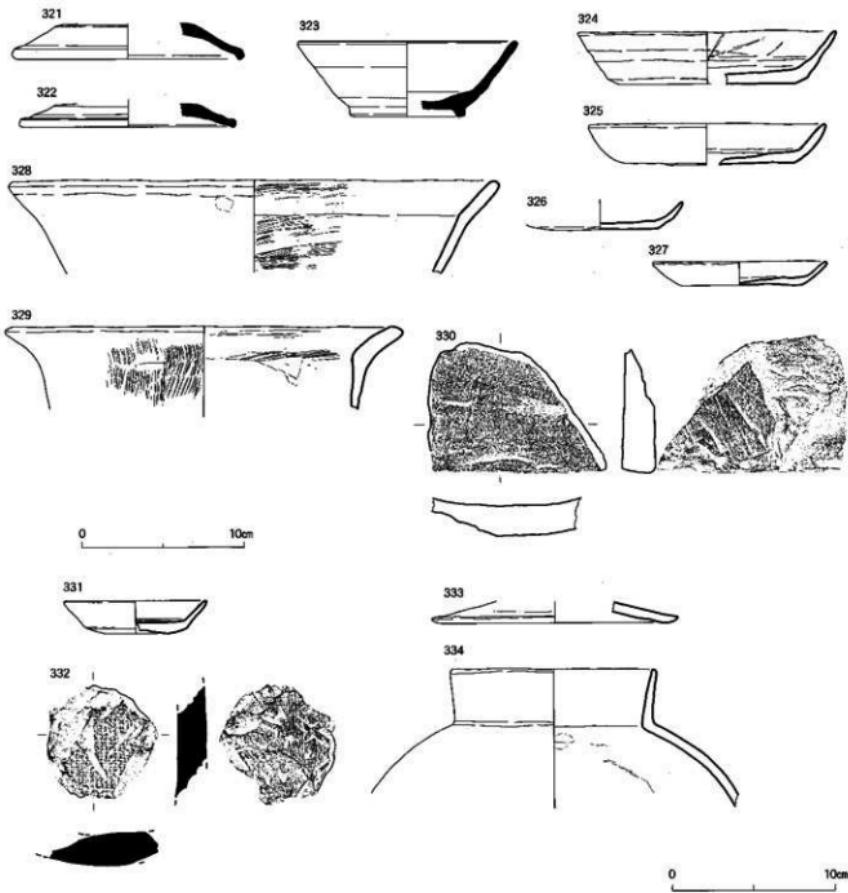


Fig.28 IV区出土遺物1 (1/3)

縁下に焼成前と思われる穿孔あり。238は復元口径19.6cmで黄褐色を呈す。内面上半は指オサ工後横ナデ、下半は斜め指ナデ、外面は不明である。239は復元口径13cmで淡黄褐色を呈す。1mm程の白色砂を多く含む。240～243は壺柄である。244は小型の鉢で復元口径5.2cm、器高5.2cmを測る。全体にナデを施す。黄褐色で細砂を多く含む。底部に黒斑あり。245～247は壺口縁である。245は復元口径15.3cmで淡黄褐色を呈す。口縁は強く摩滅する。肩部は外面縦ハケ、内面がヘラケズリである。246は復元口径17.4cmで淡黄灰褐色を呈す。内面は横ナデ、外面は不明である。247は復元口径13.6cmで明褐灰色を呈す。摩滅著しいが内面肩部にはヘラケズリを施す。248は土師質で大型壺の口縁か。摩滅著しく外面は淡黄褐色、外面黒褐色を呈す。249・250は高杯で摩滅著しい。249は復元口径17.6cmでにぶい黄褐色を呈す。250は口径18.5cmで淡黄褐色を呈す。外面は縦ハケ、内面は横方向のミガキか。251は壺脚部か。淡黄褐色で一部黒色を呈し白色砂を多く含む。252は須恵器坏蓋、253は須

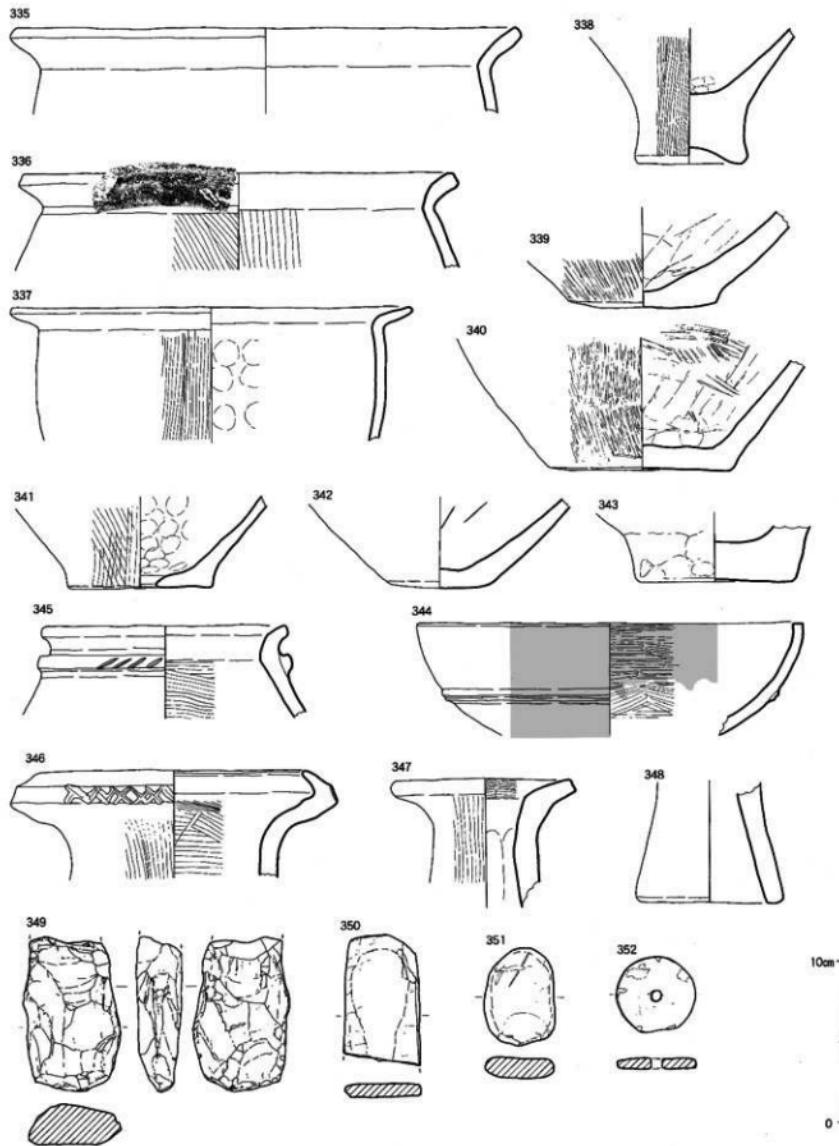


Fig.29 IV区出土遺物2 (1/3)

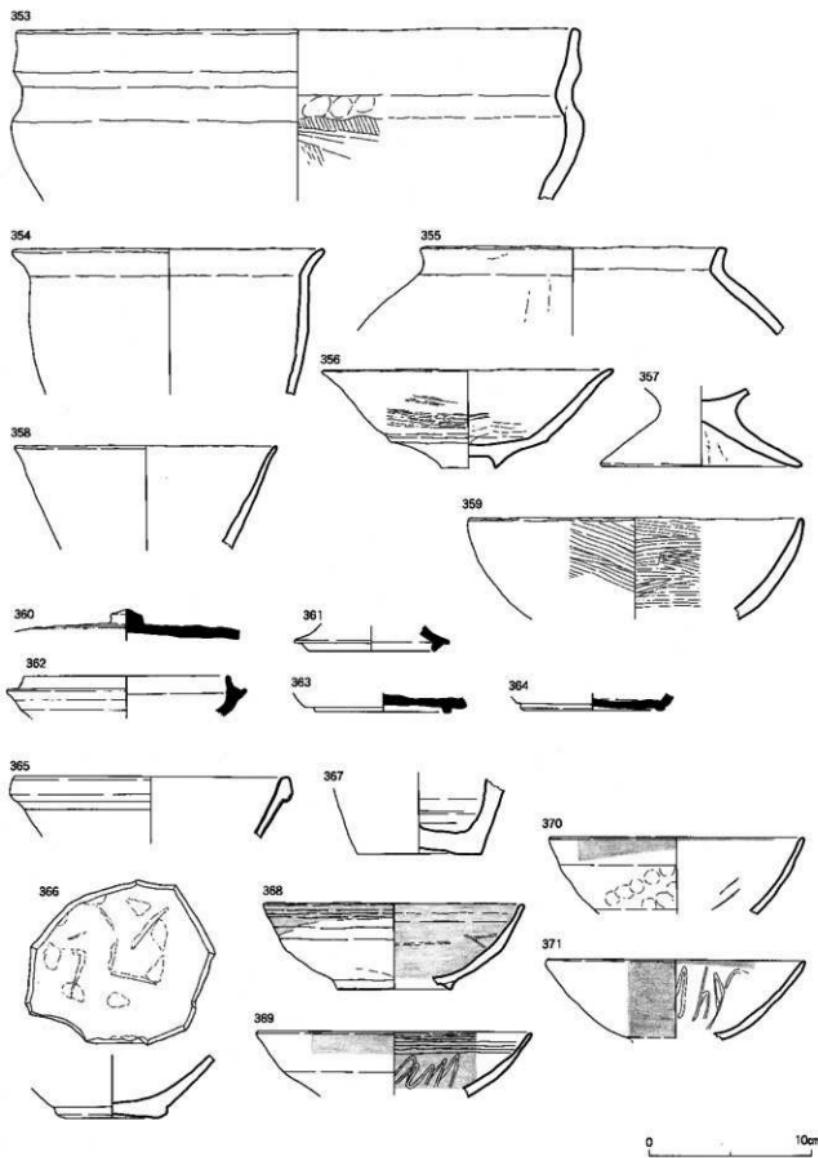


Fig.30 IV区出土遺物3 (1/3)

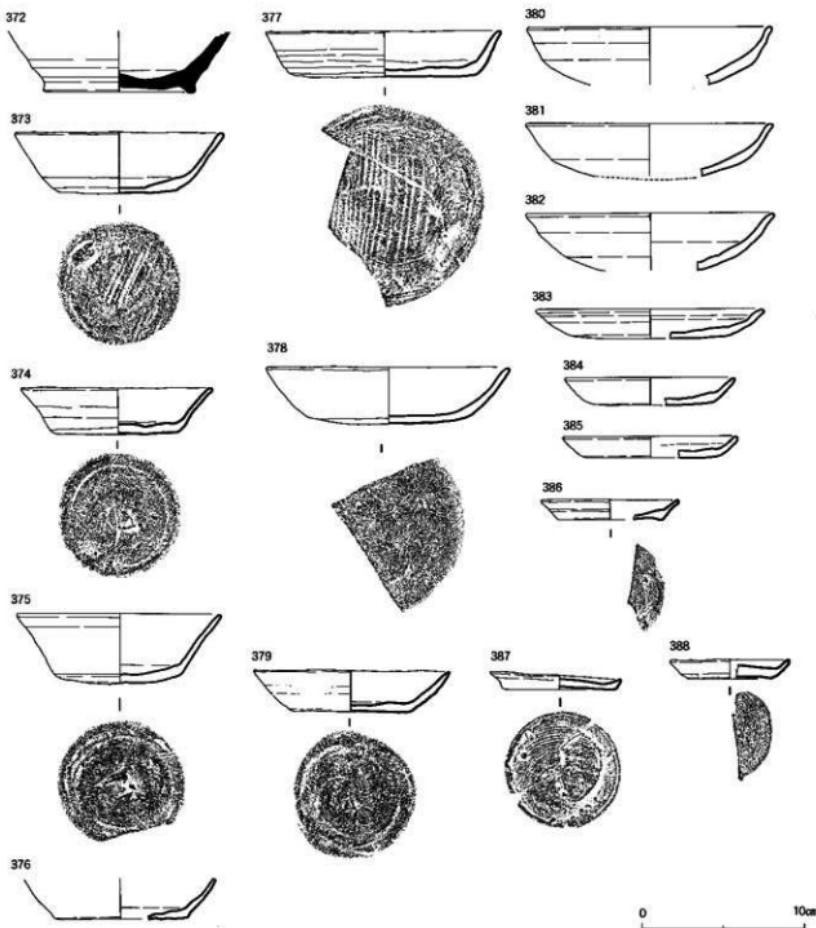


Fig.31 IV区出土遺物4 (1/3)

器底である。254は須恵器壺で復元口径12.8cmを測る。灰～暗灰色で口縁内面は縦指ナデ後横ナデ、外面は横ナデを施す。255は須恵質で鉢もしくは瓶か。復元高台径12.7cmを測る。底部は回転ヘラケズリである。灰白色を呈す。256は土師器高台付壺である。復元高台径12.6cmを測り灰白色を呈す。257は須恵器高台付壺で復元高台径7.2cmを測る。258と259は砂岩製砥石である。

260～305(Fig.24～26)はII区下層粗砂層から出土した。260と261は越州窯系青磁碗である。260は復元高台径9cmを測り、灰綠褐色を呈す。見込みに目跡が残る。261は復元高台径8.6cmで暗灰綠色を呈す。外面は高台の上数cmだけが露胎で、高台内側も釉が掛かる。262・263は白磁碗である。

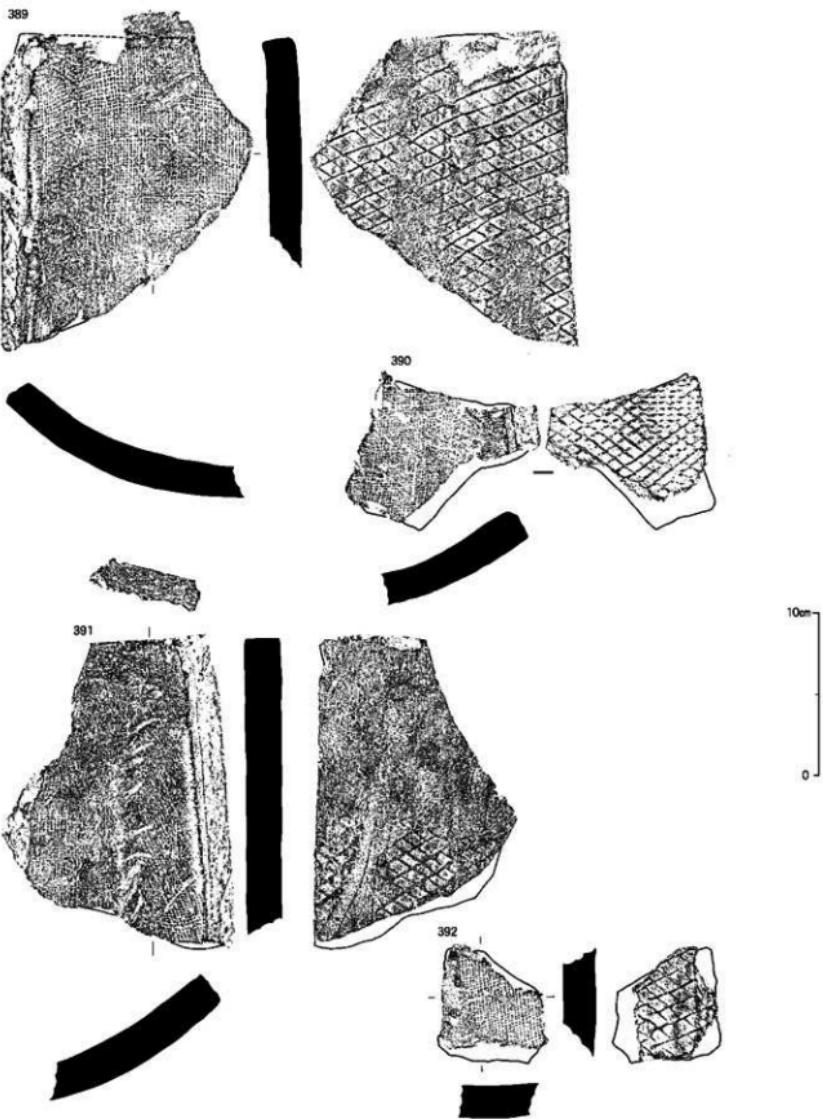


Fig.32 IV区出土遺物5 (1/3)

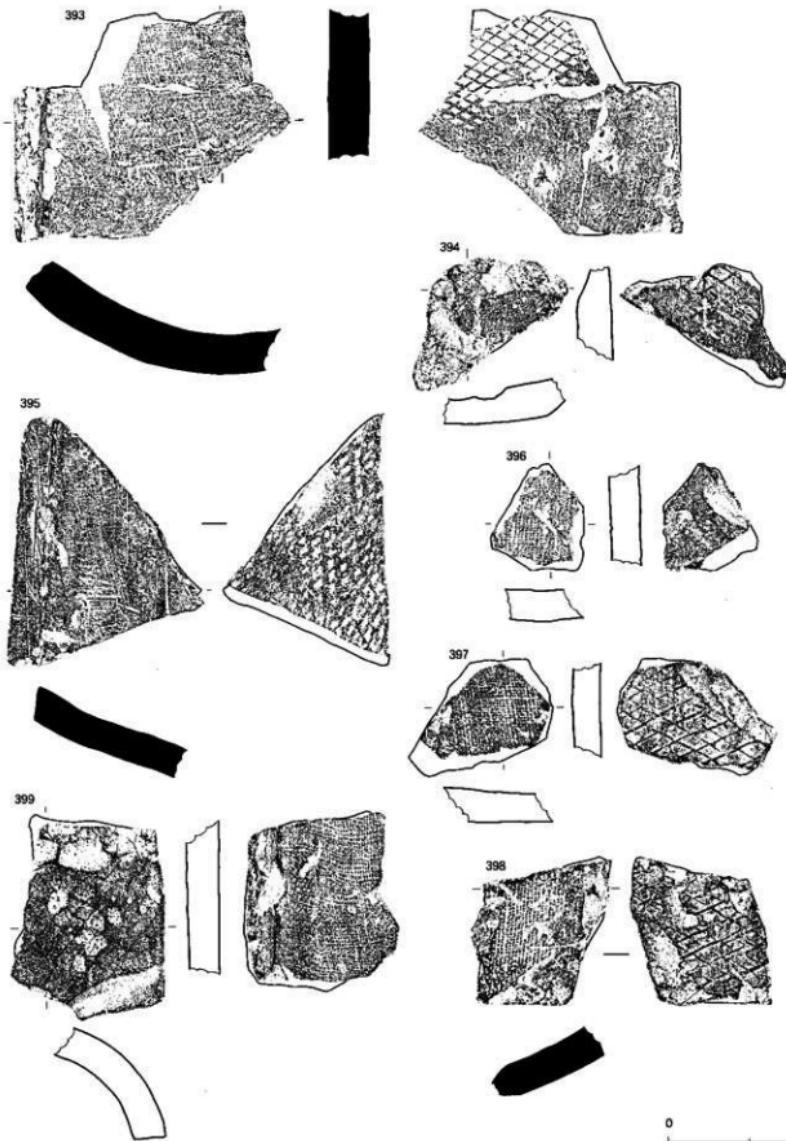


Fig.33 IV区出土遺物6 (1/3)

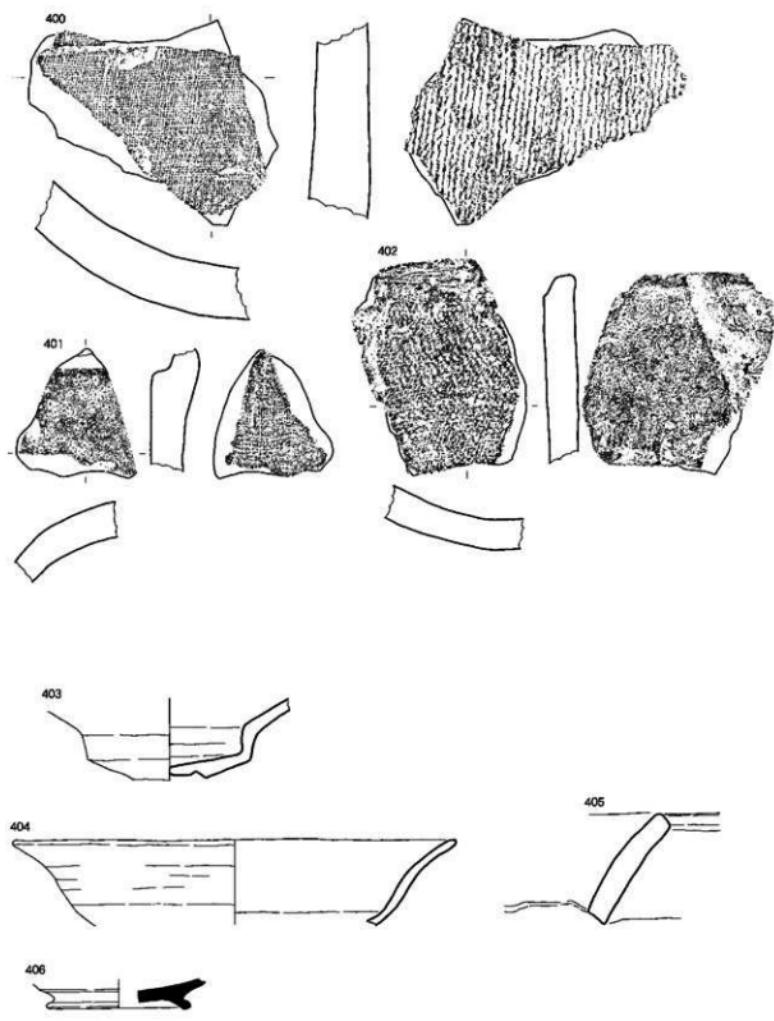


Fig.34 IV区出土遺物7 (1/3)

復元口径は262が15.2cm、263も15.2cmを測る。264は須恵器高台付坏で復元口径11.8cmを測る。青灰色を呈す。265～274は土師坏でいずれも強く摩滅する。底部は回転ヘラ切りで266と267は板状圧痕が残る。273と274は特に摩滅が著しく、底部切り離しは不明である。266と268は内面に煤が付着する。275～280は回転ヘラ切りの土師皿である。281と282は黒色土器A類楕である。281は復元口径16.2cmで外面は灰白色を呈す。282は復元口径17.2cmで外面は黄褐色である。内面は丁寧なミガキ、外面は回転ナデを施す。283・284は土鍋である。283は口縁に突帯がつく。284は復元口径約33cmを測り、内面黄褐色～淡褐色を呈す。外面は煤が付着する。285・286は瓦器楕である。285は復元口径16cmを測り、内面黒色、外面は灰白色を呈す。両面にミガキを施すが外面は難である。286は復元口径16.2cmを測り、外面と内面口縁部は黒色で、内面体部は灰白色を呈す。両面にミガキを施す。287～289は土師楕である。287は復元口径15.4cm、288は復元口径15.4cmで全体に回転ナデを施す。高台は細くて高い。淡灰褐色を呈す。289は復元口径15.6cmで灰白色を呈す。強く摩滅する。290～301は平瓦である。290～296の凸面は斜格子タタキで、298～301の凸面はナデを施す。297は瓦質で遺存状態が悪い。290、292～294、298、300は須恵質であるが、焼きが弱く292や294など土師質と区別しがたいものもある。

302は土師坏、303は土師皿でII区杭列Eから出土した。302は両面に、303は内面に煤が付着しており、灯明皿として使用している。どちらもヘラ切りで、303は板状圧痕が残る。304は河川底面に張り付くように出土した須恵器丸瓦である。凸面は斜格子タタキで、内面に布目圧痕が残る。灰白色を呈す。305も底面で出土した。玄武岩製石斧である。

III区出土遺物 (Fig.27 306～320)。306～310が上層、311～320が下層である。306は須恵器鉢。307は土師質で甕の底部か。ヘラケズリを施す。308は弥生土器の壺口縁である。復元口径は22cmで赤褐色を呈す。白色砂を多量に含む。309・310は須恵質平瓦である。309の端部は厚さの半分程の切れ目を入れて割り、破面は未調整。310の小口側はヘラによるナデである。311は白磁碗V類である。312・313は瓦器楕で312は復元口径17.4cmで外面灰白色、内面は黒褐色を呈す。体部は両面ともミガキを施す。313は復元口径17.6cmで外面は灰白色、内面は暗灰色を呈す。摩滅のため調整は不明である。314は土師皿で口径9.6cmを測る。底部は回転ヘラ切りで板状圧痕が残る。体部は内外面とも横ナデである。315は土師器甕で復元口径31.6cmを測る。口縁は横ナデ、外縁は縦ハケ、内面は横向のケズリを施す。白色砂を多く含む。316・317は須恵器坏蓋で、316は復元口径12.8cmを測る。青灰色で天井部はヘラケズリ、その他は回転ナデである。317は復元口径10.6cmで上面は口縁ギリギリまで回転ヘラケズリを施す。暗青灰色を呈す。318は須恵器坏で復元口径12.6cmを測る。赤褐色を呈し白色砂を若干含む。319は安山岩製の擦石か、3.5×3.3cmの円形を呈す。43.2gを測る。320は須恵器大甕である。青灰色を呈し、外面全面に並行タタキが残る。

IV区出土遺物 (Fig.28～34 321～406)。321～330は上層から出土した。321・322は須恵器坏蓋で321は復元口径14.2cmを測る。天井部は回転ヘラケズリで後は回転ナデである。青灰色を呈し、白色砂を若干含む。322は復元口径13.3cmで青灰色を呈す。天井部は回転ヘラケズリである。323は須

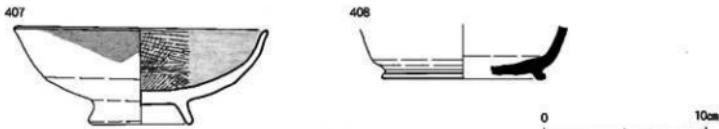


Fig.35 I区杭列出土遺物 (1/3)

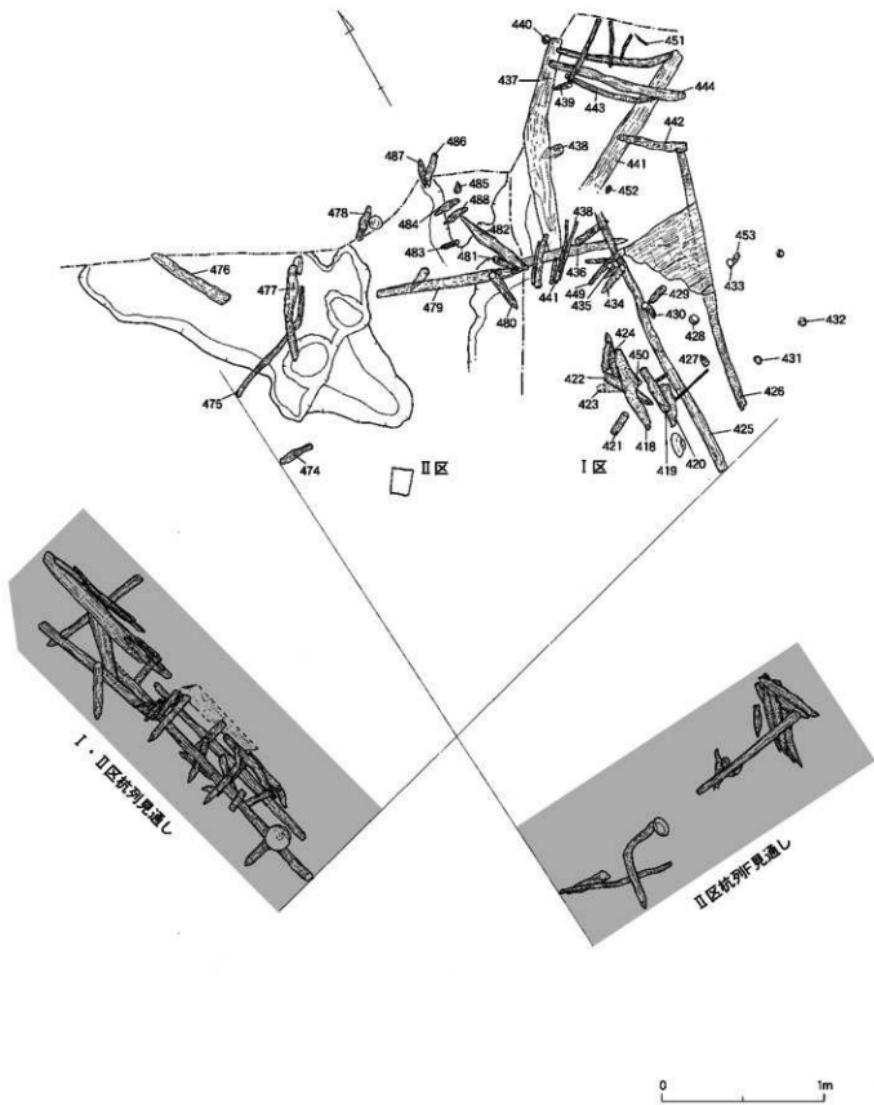


Fig.36 I・II区杭列出土状況 (1/30)

恵器高台付坏で復元口径13.4cmを測る。全体は横ナデで内底部には指ナデを施す。324・325は土師坏で摩滅が著しい。324は復元口径15.8cm、器高3.2cmを測る。灰白色で胎土に白色砂を少量含む。325は復元口径14.4cm、器高2.5cmを測る。灰白色を呈す。326・327は土師皿である。326は回転ヘラ切りで底径6.7cmを測る。内面に煤が付着する。327は口径10.7cm、器高1.5cmを測り、灰白色を呈し白色砂を少量含む。摩滅著しく調整不明。328は土鍋で復元口径30cmを測る。外面は煤が厚く付着、内面は褐灰色を呈す。胎土に白色砂を多く含む。329は土師質甕で復元口径24.4cmを測る。外面は綻ハケで黒褐色、内面部はヘラケズリで赤褐色を呈す。330は瓦質平瓦で凸面は工具の圧痕が残り、凹面はヘラナデを施す。

331～334は中層出土遺物である。331は龍泉窯系青磁皿で復元口径8.6cmを測る。332は須恵器平瓦で凸面は斜格子タタキ、凹面は布目圧痕が残る。333は土師質高杯脚部で復元底径15cmを測る。黄白色を呈す。334は土師器直口壺で復元口径12.6cmを測る。灰褐色を呈し白色砂を多く含む。

335～402は下層から出土した。335～337は甕で335は復元口径31.5cmを測る。摩滅著しい。336は復元口径27cmで淡黄褐色を呈す。体部は内外面とも綻ハケで、口縁部は横ナデを施す。337は復元口径24.6cmを測る。摩滅著しい。外面は綻ハケを施す。338～343は底部で、338は底径6.9cmで淡灰黄褐色を呈す。339は復元底径9cmを測る。外面は綻ハケ、内面ヘラによる強いナデを施す。340は底径11.5cmを測る。外面綻ハケ、内面は強いナデである。341は復元底径9cmで淡灰黄褐色を呈す。底部中央を焼成後に外面から穿孔する。342は底径6.6cmで淡灰黄褐色を呈す。摩滅著しい。343は甕底底部で径9.8cmを測る。344は高坏で復元口径23.8cmを測る。両面に赤色顔料を塗布する。外面と内面下半は摩滅著しい。内面上半は横方向のミガキである。345は甕もしくは壺口縁で口縁下に刻目突帯が付く。復元口径15.2cmを測る。外面と口縁は摩滅のため不明。内面体部は横ハケである。346は壺口縁で復元口径20cmを測る。口縁は横ナデで、頸部にはハケメを施す。347は器台で復元口径11.4cmを測る。外面は黄褐色を呈し綻ハケ、内面は口縁が横ハケ、体部がナデである。348は器台下半で復元底径9cmを測る。淡灰黄褐色を呈す。摩滅著しい。349は玄武岩製の打製石斧である。350は片岩製で刃部を欠く片刀石斧か。351は凝灰岩製の蔽石である。352は滑石製紡錘車で径4.7cm、重さ23.5gを測る。353は土師器鉢で復元口径34cmを測る。摩滅著しいが内面下半に指オサエとその下に綻ハケ、その綻ハケを削るような工具痕が残る。354は土師甕で復元口径19cmを測る。内面は淡黄褐色で外面は煤が付着、内面も口縁は黒色を呈す。全面横ナデを施す。355は土師器壺で復元口径18.6cmを測る。摩滅著しく調整不明。356・357は高杯である。358は土師質鉢か。復元口径は16cmで全面に横ナデの痕跡が残る。359は鉢で復元口径20.6cmを測り明褐色を呈す。強く摩滅するが両面にハケメが残る。外面下半は不明。360・361は須恵器坏蓋である。360は摘みが付く。361は赤褐色を呈す須恵器で蓋側に返りがつく。口縁端はナデを施す。362は須恵器坏である。363・364は須恵器高台付坏で内面は横ナデ、364は中央部に指ナデを施す。365は白磁碗IV類である。366は越州窯系青磁碗で釉は綠灰褐色を呈す。外面下半は露胎で赤褐色を呈す。367は陶器壺で復元底径7.6cmを測る。両面とも露胎で外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデを施す。灰白色を呈し、胎土に1～2mmの茶褐色粒を多く含む。368～371は瓦器碗である。368は復元口径16cmで内面黒色、外面灰白色を呈す。内面はミガキ、外面は上半が横ナデ、下半がヘラケズリである。369は復元口径16.8cmで内面黒色、外面は灰白色を呈す。調整は摩滅のため不明瞭である。370は復元口径15.6cmで口縁両面のみ黒色で残りは灰白色を呈す。摩滅して不明瞭であるが全体に横方向のミガキと思われる。371は復元口径16cmで外面と内面口縁端は黒色、内面体部は灰白色を呈す。内面は横ミガキの上から一部放射状のミガキ、外面上半は横のミガキ、下半は部分的にミガキを施す。372は須恵器高台付

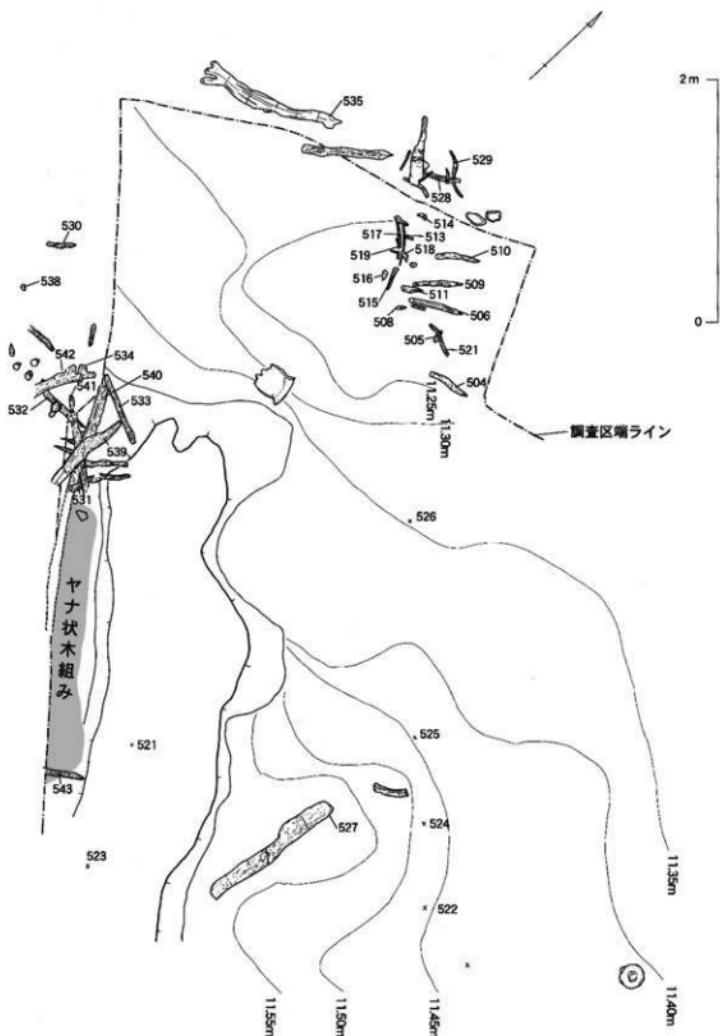


Fig.37 IV区杭列出土状況 (1/40)

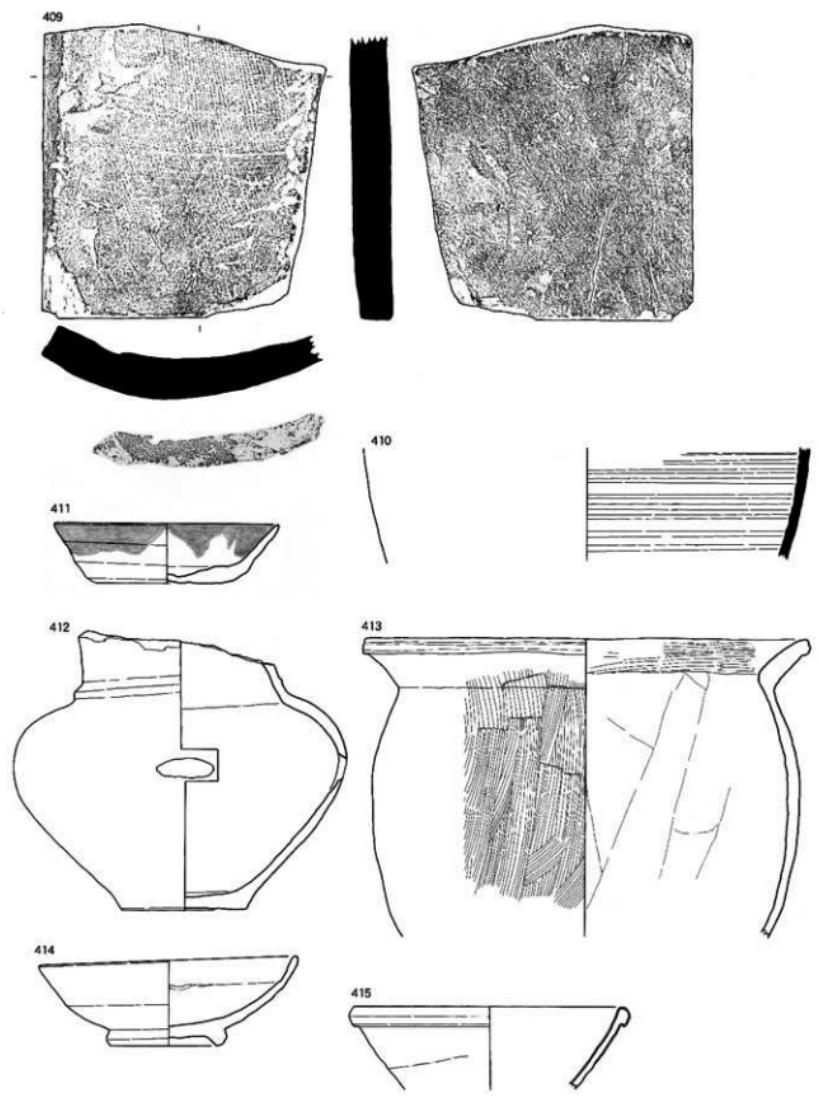


Fig.38 IV区河川出土遺物 (1/3)

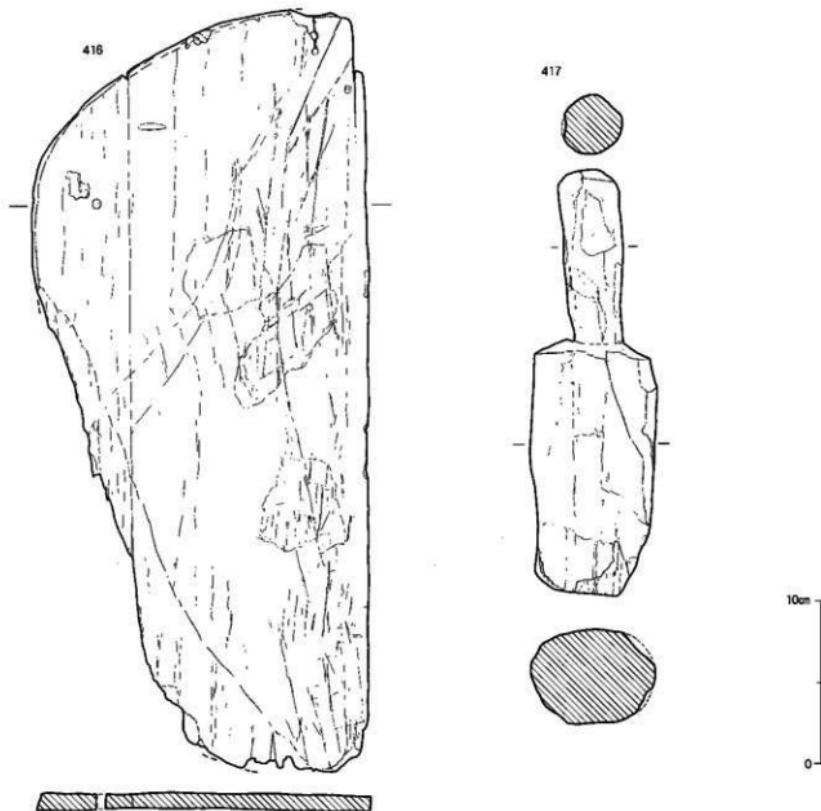


Fig.39 河川中層出土木器実測図 (1/3)

坏で復元高台径9.4cmを測る。摩滅のため調整不明。373～383は土師坏、384～388は土師皿である。389～399は凸面斜格子タタキで、399は丸瓦、他は平瓦である。400は凸面が縄目タタキの平瓦、401・402は凸面がナデで401が丸瓦、402は平瓦である。394、396、397、399～402は土師質、その他は須恵質である。

403～406はIV区西侧縁部のヤナと思われる木組みの直上から出土した。403・404は土師器高台である。405は弥生土器甕口縁、406は須恵器高台付坏である。

3) 杣

I区杭列 (Fig.5・36) 杣列A～Eが出土した。Aは北西隅に位置する井堰でII区の杭列Eと同一の井堰である(Fig.36)。1.5m～2mの木材を流れに直交して置き、縦杭を打ち込んで固定している。縱杭の間でスサ状纖維質が出土した。1m²程の範囲にススキやイネの様な細い植物纖維が薄く平面的

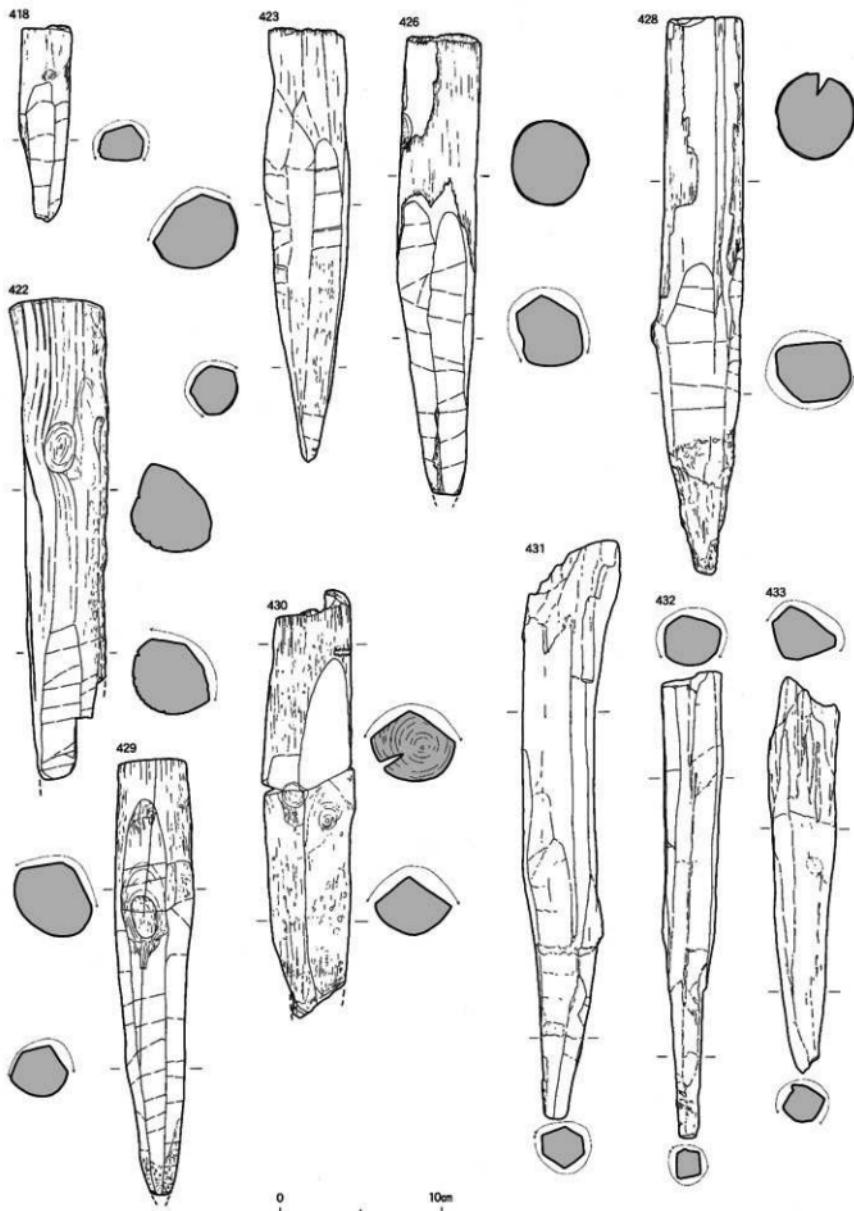


Fig.40 出土杭実測図1 (1/3)

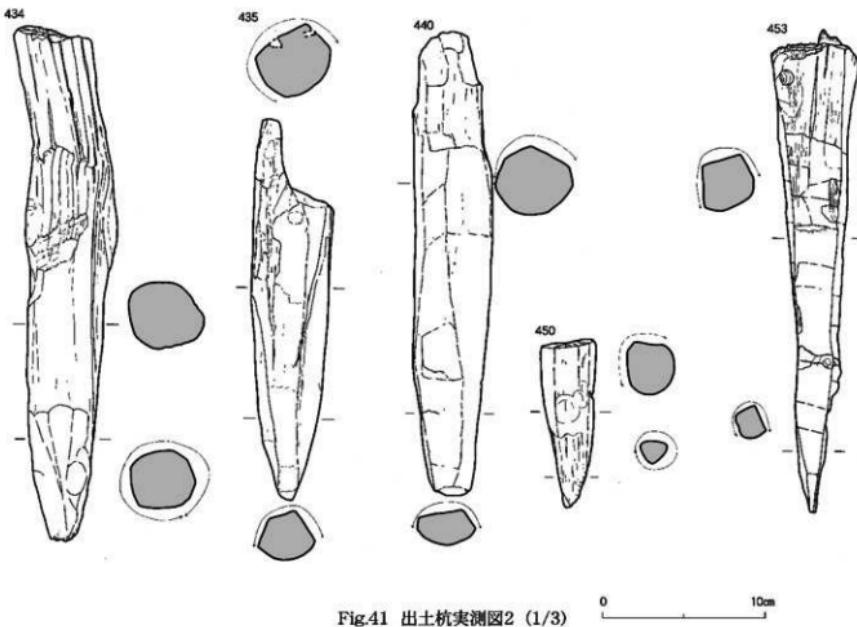


Fig.41 出土杭実測図2 (1/3)

0 10cm

に並んで帯状を呈するが、編んだ痕跡はない。井堰の中に何らかの用途で敷き詰めて埋め込んだものか。こまかに残欠が他にも数ヶ所で見られた。調査区北端は底面がやや高くなっているが、それを削ってから井堰を築いており、高まりによって流れが弱った場所だけ杭が流されずに残ったものである。井堰内から土師壺(ヘラ切り)や黒色土器などが出土しており、9~10世紀頃の杭列である。杭列B~Eは杭が削られ、河川底面に打ち込んだ部分のみが遺存していた。杭列BとCは杭列Aの延長上に並び、同じ井堰の杭である可能性がある。杭列が途切れている部分は現在最も標高が低い部分であることから、杭の下端まで削平を受けたものと思われる。杭列Cは底面に15~50cm打ち込んでおり、いずれも上側が南、下端が北側を向く。杭列Dは調査区北東隅で出土した3本で河川底面に20~30cm程打ち込んでおり、杭の上が南西、下端が北東を向く。近くで杭列Aと同じようなスサ状の繊維質が出土している。杭列Eは北端中央部で検出した2本のみであるが調査区端部に位置しており、調査区外に伸びる可能性がある。河川底面からの打ち込みの深さは30~40cmで上が北側、下端が南側を向く。出土遺物(Fig.35~407・408)。407は杭列Aから出土した黒色土器A類楕円口径15.5cmを測る。内面はミガキ、外面は横ナデを施す。内面全面と外面の一部が黒色で他は褐色を呈す。408はスサ状繊維質から出土した須恵器高台付杯である。復元高台径は10cmを測る。

II区杭列 (Fig.5) 北東端でI区杭列Aと同一の井堰である杭列Fが出土した他は、調査区北西端で杭列Gの2本のみが出土した。杭列Fは井堰の下流側端部にあたる(Fig.36)。杭の間から回転ヘラ切りの土師壺が出土した。杭列Gは先端が河川底部にわずかに届く程度にしか打ち込まれておらず、河川が埋没する途中で打たれた杭である。時期的には古代末から中世前半か。

III区杭列 (Fig.5) 河川西端で杭列Hを検出した。杭列は台地の落ち際から河川中央部に向かう3mの間に7本の杭が並んで出土した。杭は中世以降と思われる暗灰褐色土の上から打ち込まれており、時期的には中世後半~近世と考えられる。

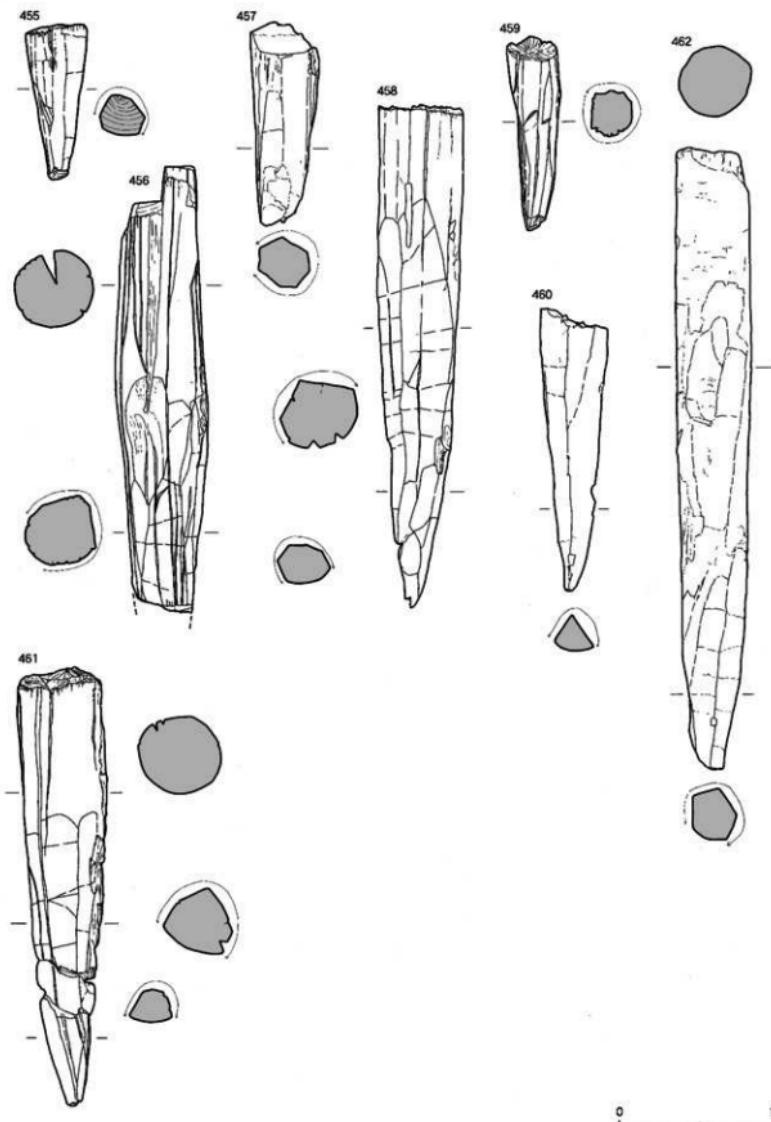


Fig.42 出土杭実測図3 (1/3)

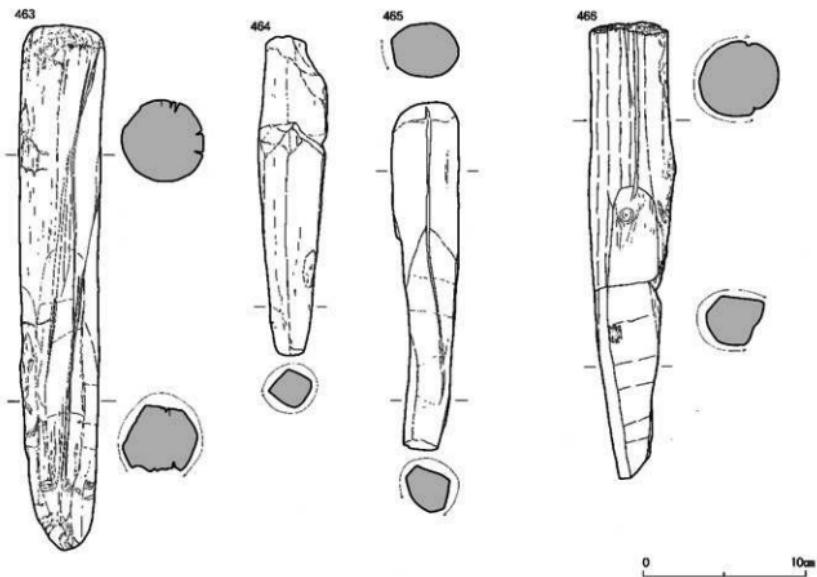


Fig.43 出土杭実測図4 (1/3)

IV区杭列 (Fig.5の杭列 I・37) 調査区西端部で杭がまとまって出土したが、土層観察では杭が打ち込まれている土壤の切り合いが激しく、どの杭が同時期であるのかよく確認できないうちに豪雨により壁面が崩壊した。杭の多くは河川底面から浮いており、Ⅲ区同様に中世後半から近世にかけてのものと思われる。最も新しい杭には竹も使われている。その他には調査区中央部に数本が散漫に分布する。河川底面から遺物が出土した(Fig.38 409~415)。409は須恵質平瓦で凸面はヘラによるナデ、凹面には布目圧痕が残る。凹面端部から3cmと中央部の一部にヘラによるナデを施す。端部は凹面側から厚さ3/4程度まで切れ目を入れてから割る。色調は灰白色で胎土に白色砂を多く含み、細かな孔が多く見られる。焼成はやや不良である。410は須恵器壺の胴部である。復元胴径28cmを測り、暗青灰色を呈す。胎土中央部は赤褐色を呈し、精良で砂をほとんど含まない。外面に少量の自然釉がかかる。411は回転ヘラ切りの土師壺で口径14cm、器高3.7cmを測る。色調は淡褐色を呈し、胎土に白色と赤褐色の粒を多く含む。口縁径1/3の内外両面に口縁から幅2cm程の範囲で煤が付着する。灯明皿としての使用で付着したものか。412は弥生時代の壺である。口縁は人為的な打ち欠きか。胴部に焼成後に外面から穿孔する。胴部はかなり扁平で最大胴径20.6cm、底径7.6cmを測る。暗灰~灰白色を呈し、胎土に白色砂の他、茶褐色粒や雲母片を含む。413は土師壺である。復元口径27.8cmを測る。内外面とも灰白色を呈す。体部は外面が縦ハケ、内面はケズリである。口縁は内面が横ハケ、外面は横ナデである。胎土に白色砂を多く含む。414は土師壺で口径16cm、器高5.6cmを測る。灰白色を呈す。摩滅著しく調整不明。胎土に白色砂を多く含む。415は白磁碗IV類である。復元口径17.4cmを測る。釉は灰白色、胎土は明青灰色を呈す。外面体部下半は露胎で胎土に黒い微粒子を少量含む。

IV区の調査区西端に沿って河川より一段高い削り残しが舌状に延びており、その一段高くなつた部

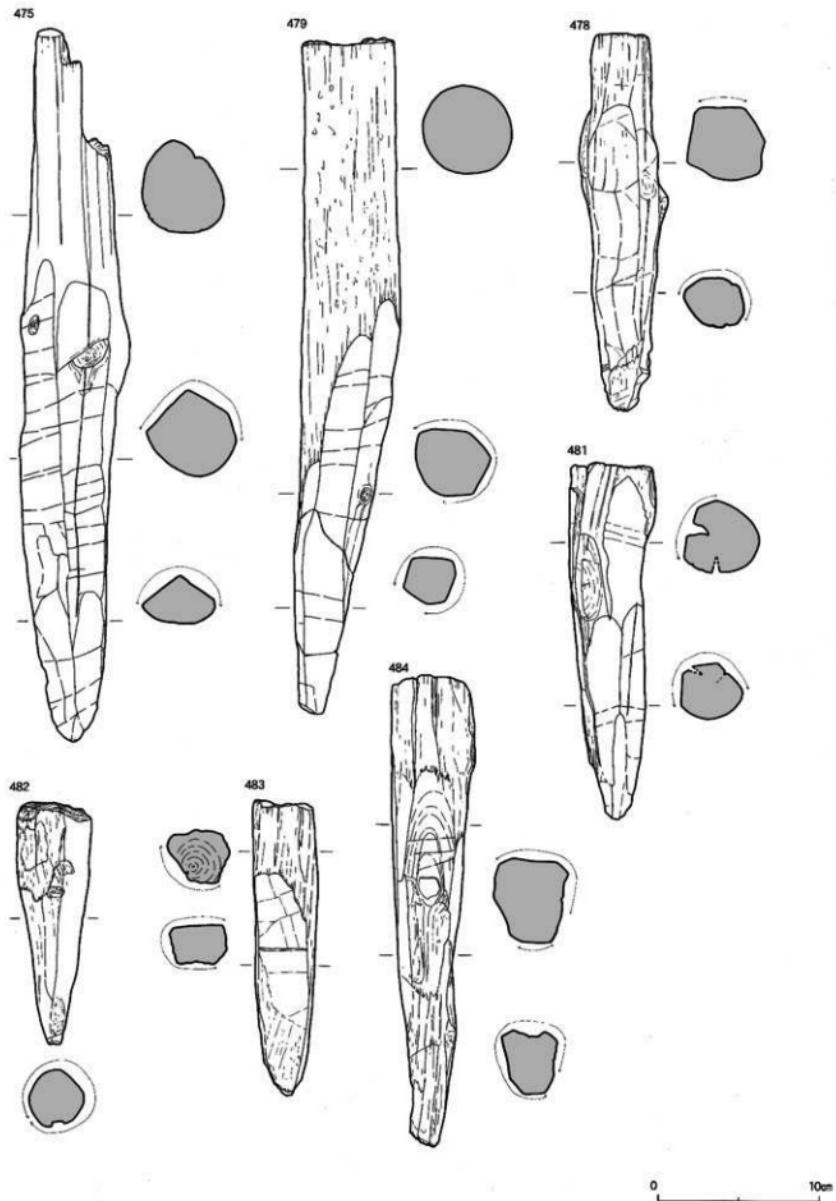


Fig.44 出土杭実測図5 (1/3)

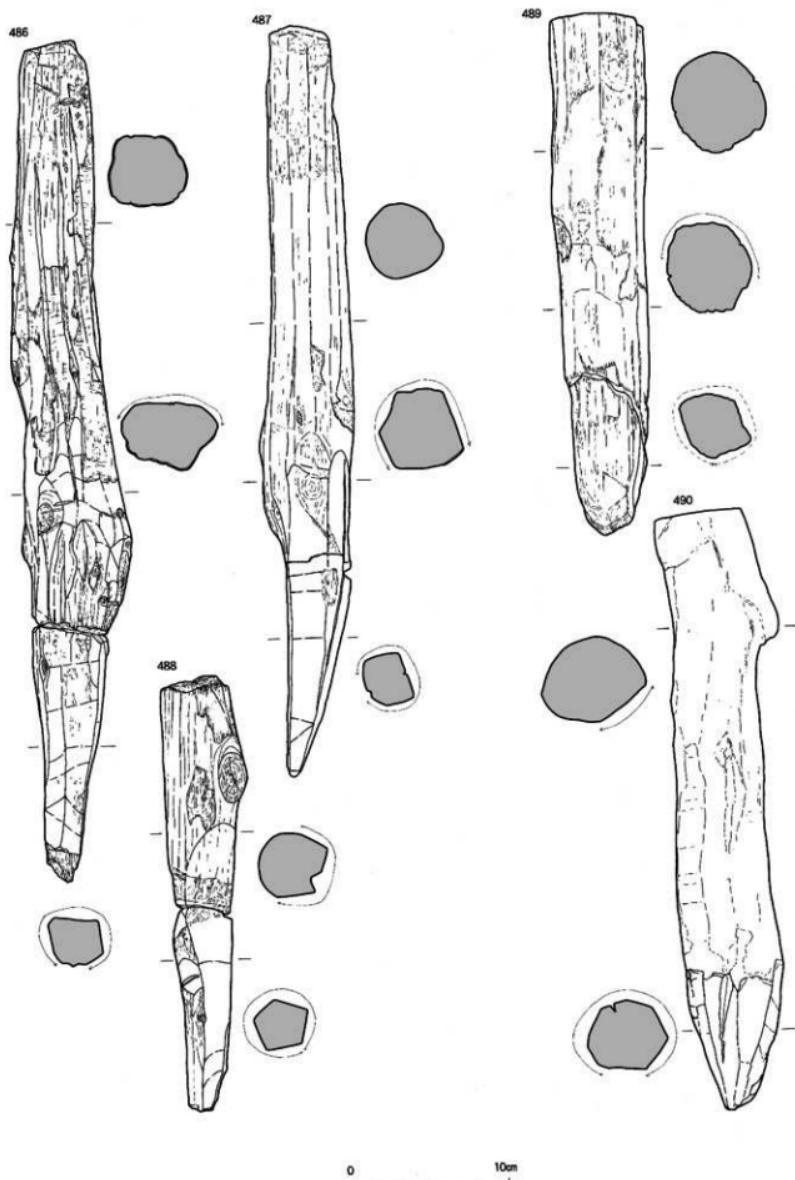


Fig.45 出土杭実測圖6 (1/3)

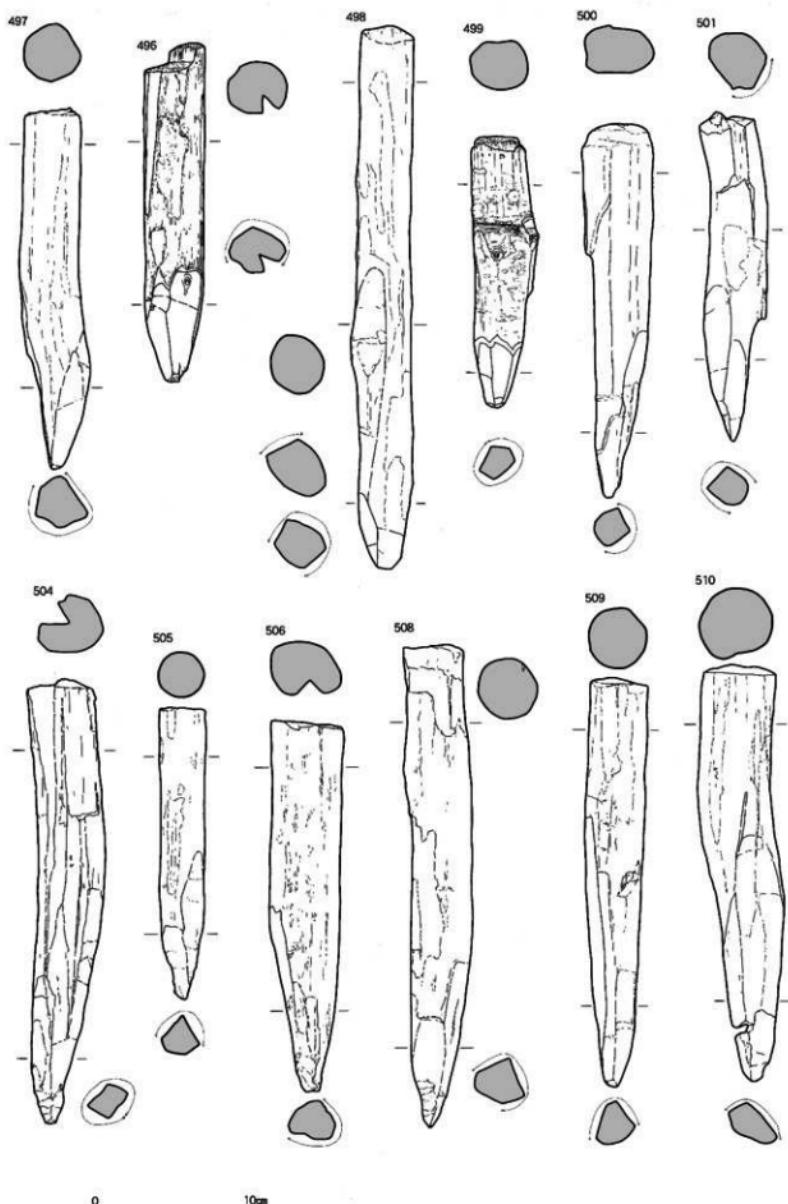


Fig.46 出土杭実測図7 (1/3)

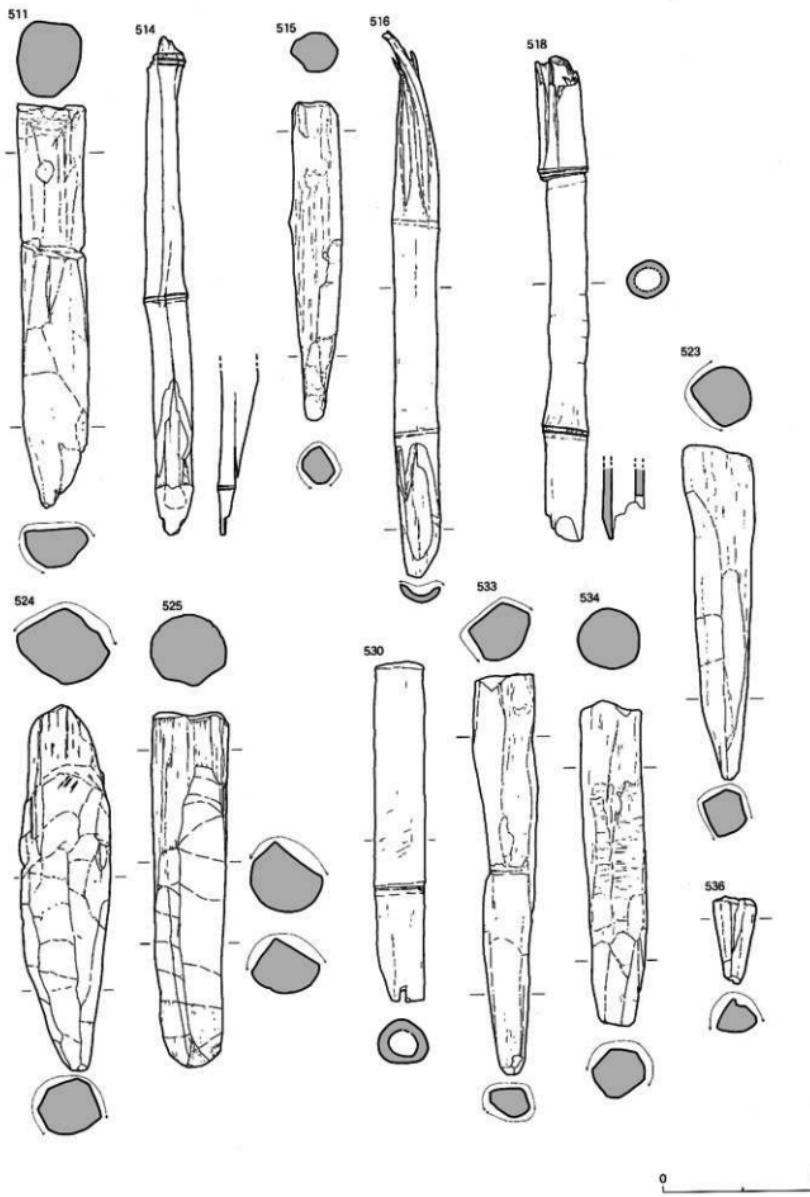


Fig.47 出土杭実測図8 (1/3)

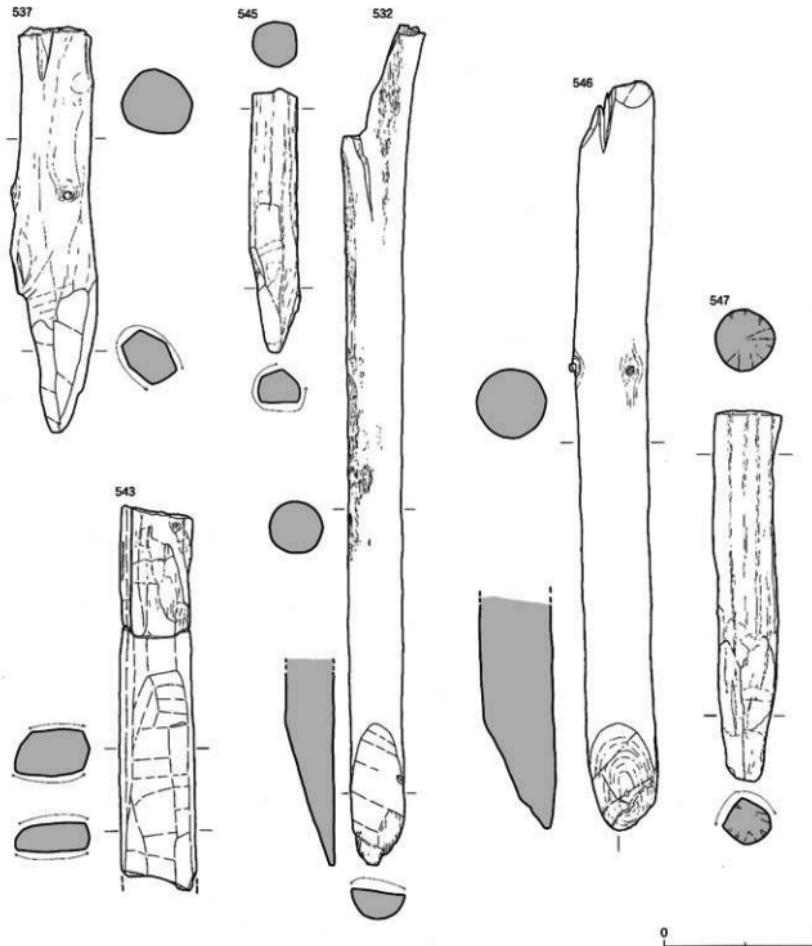


Fig.48 出土杭実測図9 (1/3)

分の床面直上で枝を並べたヤナ状の木組みが出土した(P76図版6-6・7)。ヤナ状の木組みは舌状の削り残しの縁から1m程南側にあり、周辺から5~10cmほど掘り下げた窟みで出土した。木組みの幅は約2.5mを測り、奥行きは現状で40cmを測るが、端が調査区外に延びており、全容は不明である。幅2.5mの範囲に径1~2cmの枝と0.5cm程の枝が流れに沿う方向で密に並んだ状態で出土した。幅2.5mの木組みの両端で径10cmほどの杭が木組みと同方向で出土しており、木組みの北端ではそれに直交する径10cm程の木材が木組みの下側で出土した。この直交方向の木組みは途中で調査区外になつたため、木組みの南端まで延びるのかは不明である。出土した範囲で判ることは両端に置いた杭